

教務だより

2016年11月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

勉強したい子、したくない子

茗溪塾塾長 宇野雅春

受験学年はそろそろ火がついてきたようで、オープンスペースに来る生徒の数も増えてきました。一方で「勉強したくない」受験前学年が目につく今日この頃です。

明らかに、親に追い出されてきた感じの生徒…。授業中も不機嫌。「なんでこれが将来役に立つんだよ！」的な発言も多く、「お前のせいだ！」という視線が痛い…。

自我が芽生えてくる時期＝反抗期とあっては、確かに自分のやりたいようにしたいというのがそれぞれの言い分です。自我の確立に「親を批判」するという厄介な特徴を持っているため、必然的に親は戦うこととなります。戦う事も大切なこと…。親の責任としてあるのですが、なかなかしんどいものです。そういう子供が何年かあとで、「あの時何でもっと勉強を強制してくれなかったのか？」と言うこともあるのです。なぜならある年齢に達すると、「学ぶこと」の大切さには、だれもが気づきます。学ぶことなくしての物事の成就是あり得ず、何よりも人間を形成していく中に「学ぶ」ことは不可欠であり、「学ぶ」ことに基礎学力が重要だという事です。ただし、受験勉強の場合は、学校で勉強したことのほかに、さらに勉強時間をとらざるを得ないので、その厳しさもわかってあげる必要があります。ユネスコの調べでは、世界で5800万人の子供が学校に通えていません。成人の7億8100万人（世界の成人の6人に一人）が読み書きができていないと言われています。貧困、戦争、女性であるという事が教育を受けられない主な理由です。

日本は初等教育就学率100%、中等教育就学率99%という世界でもトップレベルの環境で、仕事も知識労働が主流でさらに上位の教育を受けるのが当たり前になってきています。高校はもちろん、大学、大学院と進む生徒の割合も年々増えているのが現状です。

これは悪いことではなく良いことといえます。その結果、日本では、勉強したくないのに無理やり勉強させられる子供たちが出てきたという事です。勉強したくてもできない世界の50%強の子供と対照的です。勉強したくない子も、私の経験では煮詰まる時期の違いであって、必ずしも能力の問題ではないと思います。勉強の必要性はむしろわかりすぎるほどわかっており、「できない」ことが、意欲を失う原因であり、できないことを責められることが辛いという事です。おまけに「勉強したくない」と訴える生徒の大半は、過剰なお稽古事や激しい部活動を抱えており、スケジュールに余裕がないという現実があります。大人でも休みなく働いたりすると、ストレスが溜まります。あれもこれもと欲張らず目標に合わせてスケジュールを調節することが重要です。家族での楽しい行事がやたらあるのもどうでしょうか？つい親は子供の喜ぶ姿が見たいので、楽しいことを実現してやろうと思うものですが、(実は自分の楽しみ)受験勉強の時にこれをやると、かえって勉強が辛いものになってしまうものです。「誉めて意欲を作ること」…子供を導く大人の在り方が、難しい時代だと思います。